

英語自律学習者のための学習デザイン支援

Promoting Learning Design for Autonomous English Learners

阿部 真由美 (Mayumi Abe) 指導：向後 千春

1. はじめに

本論文では、英語自律学習者の学習デザイン支援を目的として、日本人の成人学習者を対象に、学習者の意識の調査から支援の実践、さらに今後の支援の可能性の検討を行った。

現代の日本社会においてグローバル化が急速に進む中、英語の習得を望む学習者は多い。しかしながら、英語学習の方法や成果が思うようにいかないケースも多々見られる。日本人の成人学習者が日本語とは大きく異なる英語を、英語を日常的に使用しない環境で習得するには、学習者自らが学習の質と量を確保することが求められる。その支援が社会的に必要なと考えられるのに反し、学術的な研究は進んでいない。そのような状況に鑑み、本論文では英語自律学習者のための学習デザイン支援の方法を検討する。特に、学習の内容やリソースを選択し決定する学習プランニングに焦点を当てる。

本論文は、以下の3つの研究で構成される。一つ目は英語自律学習者の学習デザインにおける意識(2章)、二つ目は英語自律学習者への学習デザインへの支援(3章)、三つ目は英語自律学習の継続をうながす学習デザイン(4章)に関する研究である。

2. 英語自律学習者の学習デザインにおける意識(研究1)

学習デザイン支援の方向を探るために、英語自律学習者の学習デザインにおける意識を明らかにすることを目的としてケーススタディとオンライン調査を実施した。ケース

スタディでは大学の授業で学生2人が記述した授業リフレクションと学習プランを分析し、学習プランニングにおける学習者のメタ認知の働きを調べた。オンライン調査ではより幅広い層の英語自律学習者301人を対象に、学習プランニング時に学習リソースを選択する根拠について調べた。

これらの調査の結果、学習者の経験や知識が必ずしも学習デザインに生かせるメタ認知的知識として蓄積されているわけではないことや、学習プランニングで重要だと考えられるメタ認知的知識が必ずしも活用されるわけではないこと、学習者は多様なメタ認知的知識を区別して意識的に使用しているわけではないことが明らかになった。それと同時に、意図的な支援によるメタ認知的知識の向上の可能性や、認知的負荷の小さい方法で複数のメタ認知的知識の統合を促進できる可能性が示唆された。

3. 英語自律学習者への学習デザインの支援(研究2)

2章の結果にもとづき、大学の授業において学習デザイン支援を実践して効果を検証した。授業をとおして学習者の個別ニーズに関するメタ認知的知識を高め、学習プランニングでは認知的負荷のかからない方法としてチェックリストを用い、学習者が各自のニーズに合った学習プランニングを行えるよう支援を行った。さらに、学習の実行度の向上と長期的な学習の継続を視野に入れ、学習者の個別ニーズに合致した学習プランニングの影響を調査した。

その結果、学習デザイン支援により学習者は自らのニーズに合った学習プランを立てられるようになった。また、

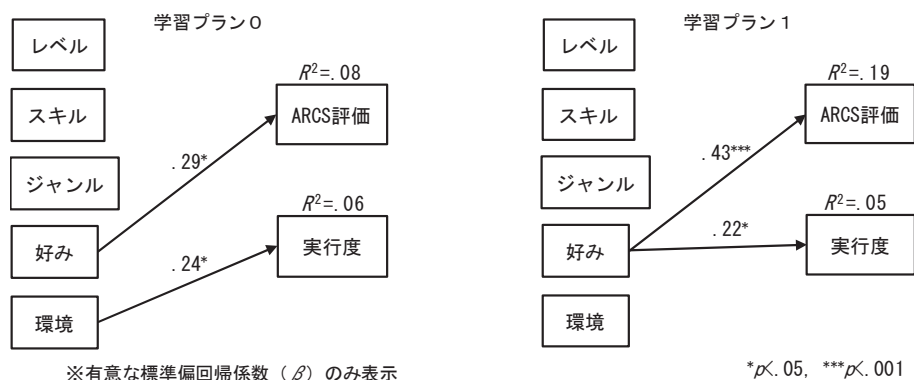


図1 個別ニーズによる動機づけ (ARCS評価) と実行度の重回帰分析

学習者の好みに合わせた学習プランが学習プラン実行中の動機づけや実行度、その後の継続意欲につながり、学習環境に合った学習プランが実行度を高めることが明らかになった(図1)。さらに、学習プランに対する好みは学習プランニングの時点で考慮するのが望ましいこと、学習環境については学習プラン実行開始後に調整可能であるととらえられていることが示唆された。

4. 英語自律学習の継続をうながす学習デザイン(研究3)

学習者の個別ニーズのうち「好み」が重要であるという3章の結果を受け、学習デザイン支援のさらなる可能性を探るために、英語自律学習者の学習方法に対する「好み」について調査を実施した。予備調査としてインタビュー調査、本調査としてオンライン調査を実施し、「好み」の構造、および学習方法による「好み」の傾向の違い、「好み」と学習行動の関係を調べた。インタビュー調査で対象者6人から得た結果と先行文献をもとに「好み」尺度を作成し、オンライン調査では有効回答者305人の回答について分析を行った。

まず「好み」尺度の確認的因子分析により、「好み」の下位概念として「拡散的好奇心」「特殊的好奇心」「刺激」「達成感」の4因子が確認された。また、学習者がよかったと感じる学習方法には「拡散的好奇心」「特殊的好奇心」および学習の有効性が共通要素として見られた。さらに、「拡散的好奇心」が学習の長期的な継続をうながすこと、学習環境に関するコスト感の低さが学習の頻度と継続に影響を及ぼすことが明らかになった(図2)。

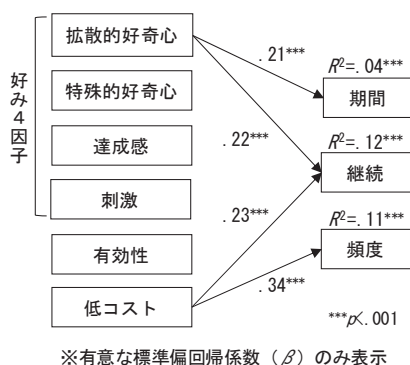


図2 「好み」による学習行動の重回帰分析

5. 研究の総括

本論文の成果として、2章から4章の調査により、英語自律学習者の学習デザイン支援に向けて次のような点が示唆された。

- ・ 学習デザイン支援により、効果的な学習プランニングに必要なメタ認知的知識を向上させることができる
- ・ 学習デザイン支援で認知的負荷の小さい方法を導入することにより、学習プランニングでメタ認知的知識を適切に活用し、学習者のニーズに合った学習プランの作成を支援することができる
- ・ 学習デザイン支援は短期間でも効果が期待できる
- ・ 学習プランニングでは、学習者の好みに合った学習プランを立てるよう働きかけることで、学習プラン実行中の動機づけや長期的な学習意欲を高めることができる
- ・ 学習プランの実行度を高めるためには、学習環境に配慮するよううながすことが有用である
- ・ 学習プランニングで拡散的好奇心を満たすような学習方法の選択をうながすことが、学習プランの実行と継続につながる

今後の課題としてさらなる学習デザイン支援の発展のために次の4点が考えられる。第一に、学習デザイン支援の提供方法を検討することである。本論文では大学の授業で支援の実践を行った。しかし、成人の英語自律学習者の多くが学校教育に属しておらず、より幅広い層に学習デザインの支援を提供する方法を検討する必要がある。第二に、効果的かつ認知的負荷の小さい学習プランニングの方法を開発することである。ニーズ分析のほか目標設定、課題分析等をどの程度まで網羅するのか精査し、それを簡易で負担の少ない手順で行う方法を考案することが期待される。第三に、拡散的好奇心を満たす自律学習者用の教材を開発することである。学習プランニングでの効果的な学習方法の選択肢を増やすという点で、これもまた学習デザイン支援の一環となり得る。第四に、学習デザインと学習効果の関係を調べることである。本論文では主に学習意欲や学習行動に焦点を当てた。今後は学習デザインが学習効果に及ぼす影響も検証する必要がある。